



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                                      |
|------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 月刊DRF 第32号                                                                                           |
| Author(s)        | デジタルリポジトリ連合; Digital Repository Federation                                                           |
| Description      | 事務局: 北海道大学附属図書館<br><a href="http://drf.lib.hokudai.ac.jp/">http://drf.lib.hokudai.ac.jp/</a> で公開したもの |
| Issue Date       | 2012-09-03                                                                                           |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/73579">https://hdl.handle.net/2115/73579</a>                    |
| Type             | journal                                                                                              |
| File Information | DRFmonthly_32.pdf                                                                                    |





# 月刊 DRF

## Digital Repository Federation Monthly

### 第32号

No.32 Sep. 2012

【特集1】平成24年度 第4回 SPARC Japanセミナーレポート  
 【特集2】平成24年度 第1回 機関リポジトリ新任担当者研修レポート  
 【特集3】DRFmed-MIS29：DRF主題ワークショップレポート  
 【トピックス】オープンアクセスウィーク素材募集！

## 【特集1】平成24年度 第4回 SPARC Japanセミナーレポート



国立情報学研究所で8月23日、DRFが企画・協力した平成24年度第4回SPARC Japanセミナー「研究助成機関が刊行するオープンアクセス誌」が開催されました。オープンアクセス出版をめぐる様々な話題の中、研究助成機関が新たなオープンアクセス誌（eLife）の刊行に乗り出したことを受け、eLife編集長Mark Patterson氏を招いて開催されたセミナーの様子をレポートします。

### 【ミニレクチャー】オープンアクセス出版の動向



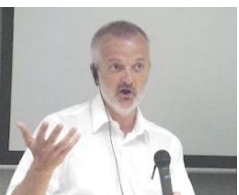
▲市原瑞基  
 (DRF/宮崎大学)

オープンアクセス（OA）誌は増加を続け、最近では著者が出版コスト（論文出版加工料＝APC）を負担するモデルが増えていること、APCは出版社や雑誌により約300-4,000ドルと幅があるが、ハイブリッドモデルでは高い傾向があることを紹介。

APCが収入源の大きな割合を占めている大規模出版社の1つPLOSで刊行しているOAメガジャーナル（OAMJ）PLOS ONEでは、科学的適格性のみを評価し、価値付けについては出版後のレビューで行うのに対して、eLifeでは査読において論文の影響度・重要度といった価値を重視し、質の高い論文を選別していることがOAMJとの一番の違いであることを説明。

eLife刊行に関する様々な反響を紹介しながら、質の高さや負担コストの低さ（当面APC無料）といった面からeLifeは研究者の注目を集めるのではないかと指摘。

### 【講演】eLife – 研究者主導の生命科学・生物医科学分野のオープンアクセスジャーナル



▲Mark Patterson  
 (Managing Executive  
 Editor, eLife)

今冬創刊のeLifeは、資金提供者（ハーワード・ヒューズ医学研究所、マックス・プランク協会、ウェルカム・トラスト）と研究コミュニティ（研究者がエディター）とのコラボレーションが一番の特徴、と紹介。創刊動機に基づく目標は以下の通り。

- (1) まだ低い生物医科学分野でのOA率向上
  - (2) 出版に至るまでのプロセスの改善（NatureやScienceのようなトップ誌ではあまりに要求が厳しく妥当性を欠くことも）
  - (3) デジタルの利便性を活かしたコンテンツの表示方法改善
- これらの改善で、一雑誌としての成功だけでなく、触媒的に研究コミュニティに変革をもたらしたいとのこと。

続いてeLifeについての詳しい説明。

- ・対象領域は基礎研究から応用・臨床研究まで幅広く扱い、意義・影響力のあるものだけを選択的に出版する
- ・査読者のレビューは1つのレターにまとめられ、再査読はない。このため査読にかかる期間を短くできる
- ・フォーマットはリッチメディアを推奨し、論文の基礎となったデータや補足データも再利用・参照しやすい形で提供する（DRYADのようなデータリポジトリとの連携も予定）
- ・研究成果の裏付けデータとのコネクション形成、これらすべての情報への一意の識別子付与
- ・著作権は著者が保持し、CC-BYライセンスで提供する
- ・インパクトファクター以外の評価アプローチのため、出版後の価値付け（メトリクス提供）も予定している
- ・当面はAPC無料

6月から投稿を受け付けており100以上の論文が集まったが、受理論文の1つが公開されており（※）、雑誌の質等について研究者が理解する目安になるだろう。将来的な財政基盤については、雑誌自身をベストにすることにより、それを基盤にしてサステナビリティが確立できるのでは、との見通しを提示。

※eLife受理論文の紹介ページ ▶ <http://www.elifesciences.org/a-flavour-of-things-to-come/>

イギリスやアメリカでのOAの動向についても解説がありました。OA誌によるOA実現を推進するゴールドOAの傾向が強まっていますが、機関リポジトリによるOA実現を推進するグリーンOAも含めた複数のアプローチが必要、また政策策定がOA推進には重要、とのご意見でした。



## パネルディスカッション

土屋俊氏（DRFアドバイザー／大学評価・学位授与機構）をモデレータとし、Patterson氏のほか、学会・出版社や日本の図書館関係者をパネリストとしたパネルディスカッションでは、会場からの質疑応答も含めて、研究助成団体による学術出版が今後の学術情報流通にどのような影響をもたらすのか、オープンアクセス出版の現在と未来について議論を深める場となりました。



▲土屋俊



▲Mark Patterson



斎藤博久（日本アレルギー学会誌“*Allergology International*”編集長／国立成育医療研究センター）  
学会英文誌は会費が収入源。PubMed採録を目指してOA化し、WoS採録も始まった。日本発の臨床研究を世界に発信する雑誌へ。



小島陽介（カルガー・ジャパン）

出版ビジネスは転換期。カルガーでも市場のニーズに合わせOA対応を進めており、現在のハイブリッドOA等に加え、今後新たなOA誌刊行も予定。



内島秀樹（DRF／筑波大学）

近年のOA誌興隆は、当初SPARCが目指していた、雑誌の競争環境創出による学術コミュニケーション改善に通ずるのではないかと。OAが図書館の実務に与える影響について考えるべき時。

ここで内島氏の発言に補足じゃ。SPARCは「学術出版と研究資源確保のための連合体（Scholarly Publishing and Academic Resources Coalition）」といって、その守備範囲は元来たいへん広いのじゃ。若い人は知らんじやろうが、「Create Change」というのがSPARCの標語での。例えばJUSTICEの交渉努力や、もちろん、大学のリポジトリ構築やDRFの活動そのものもSPARC活動と言えるのじゃ。

※Create Change（日本語）▶ <http://www.soc.nii.ac.jp/anul/j/projects/isc/sparc/create/home.html>



Dr.F

eLifeについてさらに疑問点の質疑応答があったほか、Patterson氏からパネリストに対し、派生的使用を認めていないカルガーのCCライセンスが厳しいのでは、との質問も出ました（小島氏からは「伝統的な雑誌の概念が転換していく過渡期である」との回答）。続いて土屋氏から著作権保持者とCCライセンスとの関係についての話題提起があり、Patterson氏は、著者である研究者が一番気にすることは、自分の研究成果が普及する際にソースを明示されることではないかと述べられました。



### ミニレクチャー講師の市原さんからのコメント

今回のセミナーは、eLifeや出版社のOA事情について知ることができたことに加え、Patterson氏の出版流通に革命という情熱が伝わり、とても興味深いものでした。今回、図書館の方の参加が少なかったのですが、出版業界の方のお話を聞けるととても良い機会ですので、今後のSPARC Japanセミナーにぜひ参加してみてください。



### 司会の谷本千栄さん（DRF／神戸市外国語大学）からのコメント

OA誌が今後ますます増加していった場合、リポジトリには何が登録されるのか、図書館業務はどうなるのかなど多くのことを考えるきっかけとなりました。Patterson氏の、オープンアクセスとは学術成果への障壁なきアクセスを提供するだけでなく、再利用のバリアもなくすることだというコメントが印象的でした。ご講演はeLifeについてではありませんでしたが、学術情報コミュニケーションの障害となっているものが何なのか、示唆に富んだ内容でした。



後日、Patterson氏ご自身からeLifeの特徴や狙いについてコメントをいただいたので、原文のまま紹介します！

In 2011, three of the world's leading research funding agencies - the Wellcome Trust, the Howard Hughes Medical Institute and the Max Planck Society - announced plans to launch a top-tier, open-access research journal covering the life and biomedical sciences. The key priorities of eLife are to establish a swift and decisive editorial process, which is run by a community of around 200 active researchers, and to explore ways in which digital media can be used to maximum effect in the communication of new research. The journal website will be launched later this year and will feature links from the articles to primary data underpinning the work, a flexible computer interface for developers, and dynamic measures of article impact and influence. eLife opened for submissions in June, and has accepted a small number of outstanding reports, which are already beginning to attract the attention of the scientific media and the research community. Once launched eLife will provide the foundation for a longer term effort to transform and improve research communication, with the needs of science and scientists as the core motivation.

Mark Patterson

# 【特集2】平成24年度 第1回 機関リポジトリ新任担当者研修レポート



8月23日と24日の2日間に渡り、筑波大学を会場として、平成24年度第1回機関リポジトリ新任担当者研修を実施しました（受講者23名）。受講者の感想と、講師陣のメッセージという形で研修の様子をお伝えします。

## 講義名



受講者感想

受講者に押さえてほしいポイント

第2回／第3回の受講者へのメッセージ

講師

## オープンアクセスと機関リポジトリの概要



「教員を知らずにIRの成功はない」という言葉が印象に残りました。もっと教員と接する機会を増やしていかなければと思いました。



なぜ機関リポジトリが必要とされるのか、その背景を知ることができた。

科学研究活動、学術コミュニケーションの特徴とそれらのオープンアクセス・機関リポジトリとの関係。

皆さんの機関リポジトリ構築・運営のお役に立てれば幸いです。多くの質疑応答がなされることを期待しています。



三根慎二(三重大学)▲

## 機関リポジトリの構築



自機関のリポジトリは既に構築されているので前任者が行ってきたことをこなすのに精一杯だったが、構築・運用の基本的なことを学べてよかった。



構築には計画が必要だと理解できました。ロードマップが必要ですね。

コミュニティの力。DRFメーリングリストはとても頼りになります。活用しましょう。

この研修で相談できる仲間を作ってください。

寺島陽子(奈良女子大学) ▶



## 広報・コンテンツ収集



私はまだ一度も広報活動を経験していないので、広報活動の例や心構えが学べた。とりあえず、今度のOAweekに何か行きたい。



忙しくてあまり取り組めていない広報、もう少しうちも何かできるかなと思いました。

リポジトリの広報は、図書館の宣伝にもなります。先生に顔を覚えていただけると、他の仕事の役にも立ちます。

私はこれまでに何度も、リポジトリを運営していく際のピンチを研修で知り合った方に助けていただきました。今後の実務を助けてくれる 担当者のつながりを是非持ち帰りしてください。

山田奈々(青森県立保健大学) ▲



## 事例紹介・模擬プレゼン



参考になる取り入れたい事例が多く勉強になりました。あまり他大学様のHPを見ていなかったのですが、この機会にチェックしていきたいと思いました。



模擬プレゼンが参考になりました。

リポジトリに入るコンテンツは機関により違って当たり前ですので無理に他機関の事例に合わせる必要はありません。むしろ参考にしたいところを取り入れて独自色を出す心がけが必要です。

研修は1日半ですが、内容は基本と応用に十分なものとなっています。緊張せずに楽しんで参加してください！

真中孝行(筑波大学)▲



## 著作権概論・実習



普段業務を行いながら本当にこれで良いのかと不安に思っていたことが、現状で大丈夫だとわかって安心できた。



事前課題では分からないところもありながら取り組みましたが、その結果、理解がしやすかったです。ただ著作権は様々ですし、慎重に取り組んでいかなくてはいけないことを再認識しました。

「自分が論文の著者ならどんな権利があるんだろう」と、研究者の視点で考えると、著作権の処理についての理解も進みます。

事前課題をしっかりとやってきてください。様々なポリシーがあることが分かってくると思います。

中山知士(筑波大学)▲



## メタデータ概論

文献データベースなど外部サービスのハーベスティングを受けることにより、リポジトリのコンテンツが発見されやすくなります。また、自由に設計された内部メタデータが、クロスワークによりOAI-PMHの標準に準拠した形で生成されます。講義でわからなかったことや、実際の設計で悩まれましたら、いつでもDRFメーリングリストでご相談ください！

情報の発信においては、様々なアクセス経路を用意し発見されやすくすることが重要です。文献提供者の先生方に「こんなにダウンロードされた！」と喜んでいただけるように、検索サービスにリポジトリコンテンツのメタデータを渡す方法をわかりやすく説明します。



三隅健一(北海道大学)▲

「機関」のリポジトリなのだと実感しました。基準を参考にしながら、自館での入力規則をまとめたいと思いました。

普段聞きなれない用語に少々苦戦したが、用語集が資料の後ろの方にあつてとても助かりました。

## コンテンツ登録実習

UsrComを初めて使いました。登録実習では自分の大学では使っていない項目もあったり、参考になりました。

外部サービスへのデータ提供も考慮し、メタデータにはどのような要素をどのように記述すればよいかを理解してもらえたらと思います。

細かな不注意で間違えたので、本当に登録する時には細心の注意を払ってやりたいと思います。

メタデータ作成やコンテンツの登録で、日頃疑問に思う点があったらぜひこの機会に質問してください。



徳永澄子(信州大学)▲

## 機関リポジトリの公開

自機関のリポジトリがどれくらいのデータプロバイダに登録されているのか知らなかったので、帰ったら確認したいです。

無事公開されたら、NIIへご連絡及びハーベスト申請願います (ir@nii.ac.jp)。

CiNii連携をこれからしようとしているところなので、参考になりました。

「あっさりし過ぎ」といわれましたが、確かにあっさりした内容ですので、どうぞリラックスしてお聴きください。

塩崎亮(NII)▶



## グループ討議・発表



▲ 守本瞬(金沢大学)

事前課題のスライドは、どの方もよく調べられていて、良い出来のものばかりでした。ポイントとしては「5分という短い時間でいかに伝えるか」に注力してもらいたいと思います。

事前課題は内容よりも作ることがよい練習になります。“人に説明できる”=“よく理解している”です。当日の講義、仲間との話し合いを通じて、理解→説明できるようになってください。



▲グループに分かれて討議



すでに機関リポジトリを運用している図書館の方がメンバーにいらっしやったので大変勉強になりました。当館は未実施のため、よく理解できていなかった部分が、実施館の方のお話を伺ってよくわかりました。



今年度のDRF研修修了、第1号！猛暑の中、1日半の研修お疲れ様でした。自分の大学に戻って、早速研修の成果を生かして活躍してほしいわね！



▲講師陣を仮想教員に見立てて模擬プレゼン



▲仮想教員との質疑応答



他大学さんの細かい状況や意見を聞くことができて大変参考になりました。発表の質疑で自分の無知さを知り、勉強不足を痛感しました。



質問への回答が苦難でしたが現実はずっとシビアなのだろうと思うといい経験になったかと思います。ありがとうございました。

## 【特集3】DRFmed-MIS29：DRF主題ワークショップレポート

医療系図書館員、情報サービス関係者が一堂に会す医学情報サービス研究大会（MIS）。東京・築地の聖路加看護大学で行われた第29回大会（MIS29）で、8月26日、DRF主題ワークショップ（医学・看護学）「DRFmed-MIS29 -リポジトリで発信する医療情報・病院図書館との連携-」を開催しました。

医学系大学図書館で、病院誌や看護研究誌などに掲載されている文献への需要が高くなる一方で、発行部数、寄贈先の限定などの理由により、それらの入手が非常に困難な状況になっています。その状況に病院図書館（室）と大学図書館がどう関わり、また機関リポジトリがどのような役割を果たすのか。そのような議論を交わすための場を作りたいという思いから、MIS29の参加者企画として実施した今回のワークショップの様子をレポートします。

＜レポート：和田崇（DRF集会WG／奈良県立医科大学）＞

### 第1部：基調講演・事例報告



#### 基調講演

「機関リポジトリを構築することで人々を幸せにする」

鈴木正紀（DRF／文教大学）



#### 事例報告①

「病院図書館でのリポジトリ導入事例」

天野いづみ（日本赤十字社医療センター医学図書室）



#### 事例報告②

「ILL担当者から見た機関リポジトリの展望」

木下智子（DRF／奈良県立医科大学）

午前中に行われた第1部では、過去実施したDRF主題ワークショップ（医学・看護学）の記録から予想した参加者数を上回る、72名もの参加がありました。（うれしい悲鳴でした。）

鈴木氏の基調講演は、機関リポジトリの基本的な説明とその活用方法、さらには病院図書館に対し機関リポジトリがどのような関わりを持っていくべきかという、盛りだくさんながら機関リポジトリ初心者にもわかりやすくまとめられた内容でした。講演中の「日本の機関リポジトリ構築機関数は世界で何番目に多いと思うか（正解は現在第4位）」という参加者に向けた質問では、「50位くらい」と考えている方が多かったのが印象的でした。そのような方に対して、「機関リポジトリとはどういうものか」を紹介する機会が持てたことも収穫だと思っています。

事例報告では、日本赤十字社の機関リポジトリ（赤十字リポジトリ）を構築するに至った経緯や、その後の構築までの困難を極めたミッション、構築後の状況などを天野氏が報告しました。また木下氏は奈良県立医科大学の相互貸借の受付業務から見た、病院誌・看護研究誌の利用状況、奈良県内の病院との共同リポジトリ化を目指している経緯を紹介しました。

### 第2部：パネルディスカッション

## 「医療情報と機関リポジトリ－現場からの声－」

総合司会(第1部・2部とも)

#### パネリスト



天野いづみ

日本赤十字社  
医療センター医学図書室



増田徹

近畿病院図書室協議会



土出郁子

大阪大学  
生命科学図書館



和田崇

DRF／奈良県立医科大学  
※コーディネーター兼務



坂本祐一

DRF／大阪大学

午後は病院図書館側の担当者と大学図書館側の担当者、計4名がパネリストとなり、それぞれ話題を提供した後、フロアの41名を巻き込んだパネルディスカッションを行いました。



会場からは「病院図書館は人手不足で機関リポジトリに参加できる余裕はない」という意見もありましたが、一方で「メタデータの作成や文献の電子化も済んでいるが、その公開の方法を現在模索中である」といった意見もありました。まさにDRFが力になれると感じた場面でした。

全体的には機関リポジトリに対し肯定的な意見が多かったのですが、前述のとおり人的理由などでの困難な事例があることも知ることができ、今後の課題も見えてきたディスカッションとなりました。

今回のワークショップは、DRF単独開催ではなく、大きな大会の企画に応募して実施するという形を取りました。それだけに参加者の幅もより広く、より注目されるイベントとなり、DRFにとっても収穫がありました。

第29回医学情報サービス研究大会 ▶ <http://mis.umin.jp/29/>

DRFmed-MIS29 ▶ DRF-wiki (<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/>) の「イベント情報」

## トピックス

### オープンアクセスウィーク (OAW) 2012素材募集！

OAWはアメリカのSPARCが主催しているイベントです。6回目を迎えるOAW2012は10/22～28です。日本国内を盛り上げるための素材を募集します。

ルールはたった2つ：

- ・ベースはオレンジ（OAW公式カラー）
- ・ロゴまたはOAW等の文字を入れる



▲今年のテーマは「オープンアクセスを既定値にしよう」

募集期間：平成24年9月3日～10月21日

送付先： [oaw@lib.hokudai.ac.jp](mailto:oaw@lib.hokudai.ac.jp)

※あなたの機関のオープンアクセスな写真（素材制作中の様子なども歓迎）もあわせて募集！上記送付先までお送りください。

昨年の素材集より



▲紙芝居



▲ロゴ表示JavaScript



▲カレンダー

- ポスター／チラシ
  - パンフレット
  - バッジ・シールのデザイン
  - 動画
  - 紙芝居
- など、あなたのアイディアをお寄せ下さい。

※PowerPoint等、ファイル内容の変更が可能な一般的なソフトウェア（サイズ自由）で製作して下さい。動画等のマルチメディア作品の場合は特に形式は問いません。お送りくださった作品は、OAW2012 in JapanサイトおよびDRFサイトに掲載し、誰でもダウンロード・変更・再利用できるものとします。

OAW2012 in Japan ▶ <http://cont.library.osaka-u.ac.jp/oaw/>

昨年のOAW写真 ▶ [http://www.flickr.com/photos/drf\\_museum/sets/72157627840414111/](http://www.flickr.com/photos/drf_museum/sets/72157627840414111/)

昨年の素材集 ▶ <http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?OAWWeek%202011>

【特集】平成24年度 第2回 機関リポジトリ新任担当者研修レポート

【特集】rliasionワークショップ「Do aim too much！」（欲張って行こう！）レポート ほか

月刊DRF読者アンケート回答受付中！▶ [http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf\\_inq.html](http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html)

編集後記：初めて月刊DRFの編集を担当しました。9月号どうでしたか？ぜひ上記アンケートでご意見ご感想をお送りください。（HamaGon）

月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています。 [gekkandrf@gmail.com](mailto:gekkandrf@gmail.com)

<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf/> 月刊DRF第32号 平成24年9月3日発行 デジタルリポジトリ連合

